
IS ~ クラスメイトは全員男 ~

渡鴉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS 〱 クラスメイトは全員男 〱

【Nコード】

N7994X

【作者名】

渡鴉

【あらすじ】

遊んでいると突然意識を失った主人公とその友人。目が覚めた時、彼らの世界はIS>インフィニット・ストラトスクの存在する世界に変わっていた!?

1話

「なんだかんだ言ってもさ、やっぱりIS面白いわ」

表紙を黒の文庫カバーで隠したラノベ　IS<インフィニット・ストラトス>を読みながら友人の藤原はそう言った。

「そうか？　……悪くはないとは思っただけど、主人公がいかにもアレな鈍感キャラすぎてちょっとなあ……」

インフィニット・ストラトス。通称^{アイエス}IS。

女性にしか反応しない兵器「インフィニット・ストラトス」を“何故か”起動させることができた主人公「織斑一夏」は、ISの操縦者を育成するための学校・IS学園に強制入学させられることになってしまう……という内容のライトノベルだ。

ISは本来女性にしか反応しない兵器。その学校であるIS学園は当然、女子生徒しかいない。女の花園に男が一人……なんつーか、『典型的なハーレム系のエロゲーから18禁成分だけ抜きました』というのが、初めてあらずじを聞いた時の第一印象だった。はいはい、エロゲーエロゲー。

「そんなのハーレム系の主人公だと大抵そうだろ。主人公が聡いと成立しねえじゃん。誰かとくっついて即終了。てかさ、逆に相手の気持ちに気づいてるのに答えも出さずに弄ぶ最悪な奴になっちゃうぞ」

「まあ、……確かに」

最もな話である。

そもそも一夏はスペックだけ見ればトンデモない。顔は姉に似て整っている、ぶつちやけイケメン。飄々として見えるが実は熱い性格の持ち主。剣術の才能もあり、家事スキルも高い。これで鈍感なのと作中で最弱(?)であることを克服したらもはや完璧超人だ。第一部んときの夜神月にも匹敵するパーフェクトっぷり。ワンサマーさん嫌いじゃないわ。

勿論、主人公が誰か特定の女性を一途に思っていて、様々な困難を乗り越えながら最後には結ばれる。あるいは中盤で両想いになった後のドタバタを書いたラノベもあるにはあるが、それはもうハーレムとは言わない。

「てか小野田はアニメしか見てないだろ。原作読め原作！ ISに限らず、アニメじゃ省かれたり尺の都合で書けない独白とかも書かれてるから」

「とりあえず wiki と 1 巻だけは読んだよ」

「……最新刊まで読めよ。貸してやるから」

「読もうとは思ってるが時間がないの。あっ！ ゼロ魔は読んだぞ、とりあえずアルビオンの 7 万戦のところで」

「へー」

1 巻のルイズがウザいのと才人の行動がアホすぎて読むのやめようかと思っただが、だんだんと面白くなってスラスラ読めた。途中から才人やルイズの言動もあんま気にならなくなったし、面白いです。

「ハーマイオニーに踏まれたっていう作者の欲望を書き連ねたのがゼロ魔だからな」

「ああ、… そうなんだ」

「……ノボル先生大丈夫だろうか。もう少しでゼロ魔完結だし頑張っ
って欲しい。」

「てか、そもそもISを知ったきっかけが二次のSSだったからさー。アニメと原作読んで驚いたわ。一夏の性格とか色々……」
「……なんで原作知らないのに二次で読んでんだよ。つかSSってアレか？ メアリー・スーなオリキャラが出てきて大活躍する“アレ”な内容の？」
「いんや、クロスオーバー。好きなロボ作品だったから興味持って読んでみたんだよ」

ちなみに藤原が言ったメアリー・スーとは所謂、「ぼくのかんがえたさいきょうのキャラクター」の代名詞だ。

これはスタートレックの二次創作を風刺した、ある作品に登場するキャラクターの名前が元ネタになっている。

キャラは全知全能。すさまじい知識、あるいは全てを支配するかのような能力を持ち、問題があれば都合主義で即解決。どんなヒロインからも好かれ、嫌う相手は断罪する。不幸な過去か悲劇的な設定を背負い、他のキャラを罵倒したり欠点を挙げて徹底的になじつたりする。……つまりは痛いキャラだと思ってくれてかまわない。

「はあ、……俺はそういう二次創作とかはもういいや。読むつもりもないし、原作がありゃそれでいい」
「あらま」

言っと、藤原は再び持っていた本に視線を落とした。……藤原はSS関係の話題になるとあまりいい顔はしない。

二次創作のSSといえばオリキャラが活躍する作品がよく目につくが、別に二次創作というのはオリキャラを主人公に置いたものしか存在しないわけではない。

原作後の話を書いたアフター。原作の展開を変える再構成。キャラクター同士恋愛模様を書いたCP^{カップリング}。主人公がやり直しをする逆行・ループ。スパロボのように複数の作品を掛け合わせるクロスオーバー。原作キャラの性別が変わっているTS。

ただ、作者のオリジナルキャラクターが主人公になっている作品の中には、前述したようなメアリー・スー的な作品が非常に多いのだ。最強の設定や力を与えられ、原作キャラを蹂躪したり、登場するヒロインを片っ端から落としてハーレムを作ったりするメアリー・スー的な作品というものは良い意味でも悪い意味で目立つ。オリジナル主人公というだけで敬遠する人もいるのだ。

……オリキャラとは言ったが、メアリー・スーは二次創作において自己投影や改変が酷いキャラを指す時にも使われる。KanonのUIとか、エヴァのシンジとか、とら八の恭也（高町なのはの兄）とか、ナデシコのアキトやFateの士郎なんかもそうだ。主人公魔改造である。

閑話休題。

「……あのさ」

「何だよ？」

ぼつりと、藤原が本を読みながら顔は向けずに聞いてきた。

「ISとのクロスって言ってたけど、どんなロボット作品なんだ？」
「どっつしたのさ、いきなり」

僕の質問に、藤原は本をばさりと机の上に置くと頭を掻きながら答える。

「いや、ISの大きさをそうデカくないだろ？ パワードスーツなわけだしさ。」

MS少女とかストライクウィッチーズとのクロスならともかく、ガンダムとかアーマード・コアみたいな機体だとサイズ合わねえんじゃないか？」

最もな疑問である。

「ん……僕が読んだところにあるのだと、別作品のロボがIS化つてのが多かったな。次に機体を人間サイズに変更するとか」

「はあ？ なんだよソレ？」

A作品のキャラがISの世界に来てA作品のロボがIS化したものに乗るといふ、ある意味突っ込みどころ満載の設定だった。MSやACがりりなの世界に行くとデバイス化つてのと同じ謎展開である。

恐らくは整備面をどうするか考えるのが面倒臭いからと、デカイ機体のまま小さい相手に勝利しても絵面的に面白くないから。……バトル漫画でも、小柄な奴が筋肉質な大男を倒すというのは日本人の好みだし。

そう説明すると、藤原は「ありえねえ」と言いながら頭を振った。

「分かってねえなあ……分かってねえ……！」

本来の姿からかけ離れたフォルムにしてどうすんだ？ あの大きさと重量感があるからこそそのロボだろうが！ そんなの使うくらいなら最初から人間サイズのSD頑駄無使えよ」

「いや、そう言われても困る」

その後も藤原は連連とロボの魅力について語ってくる。具体的には30分くらい。……08小隊とか好きだからなコイツ。でもなあ

……、
「そうは言っても、IS操縦者としてIS化した機体に乗れるとしたら乗ってみたいだろう?」

「おう! そこは男のロマンってことだな」

聞こえてきた問いに藤原が威勢よく答える。

「ジェフティとかネクストACとかジェノブレイカーに乗れるとしたら乗ってみたいだろう?」

「うん。……まあメタトロンの毒とかコジマ汚染とか精神が廃人になるのはカンベンだけどね」

続く質問に僕が答える。やはりああいう機体には憧れがある。他にはガンダムとかヴァルキリーとか。

仮にそのような機体が現実にあつたとしても、自分に操縦できるはずがないと分かつてはいるのだが、それとこれとは話が別だ。思うだけなら罪にもなるまい。

そこまで考えて、異常に気付いた。

いま、この部屋には僕と藤原の二人しかいない。

なのに、さっき話しかけてきた中性的な声は、誰…?

……。藤原も同じことを考えているらしい。お互いに顔を見合わせて、そして二人同時に振り向く。

「……………え、」

覚えているのは、強烈な、眩いばかりの光の濁流。

そこで僕たちの意識は一端途切れる。

そして目が覚めた時、世界は一変していた。

《 IS 〽 クラスメイトは全員…… 〽 》

春。満開の桜の下、学生たちが入学あるいは新学期を迎える季節。それはここ、IS学園も例外ではない。

「じゃ、じゃあ自己紹介をお願いします。えつと……出席番号順で」

先ほどおどおどしながら自己紹介を終えた副担任 山田真耶は涙目になっていた。その原因は教室を包む気まずい空気だ。

IS学園1年1組の教室は妙な緊張感に包まれていた。

……無言。誰も、一言も発しない。

につこりと微笑みながら挨拶をしたはずが、一人の生徒からも反応がない。

1組の生徒は31人。その31人中の実に30名がある一人の生徒に注目していた。

ある者は睨みつけるように。ある者は興味深そうに。ある者は二

ヤニヤと面白そうに。ある者はサングラス越しに目を隠して。ある者は顔色の悪い表情でジロジロと。ある者は無表情に……………。

その生徒の名は、織斑一夏。世界で最初に発見された男性のIS適合者である。

『世界で唯一ISを使える男』というのは世界的なニュースになり、テレビや新聞雑誌で連日報道され、一夏の自宅や通っていた中学校には昼夜を問わずマスコミが張り付いた。

だが、今の彼の称号は『世界で唯一ISを使える男』ではなく、『世界で最初に発見されたISを使える男』になっていた。

それは何故か？ 答えは教室を見渡してみれば分かる。

男、男、男、男……………。

このクラスは全員が男子生徒だった。

女性にしか使えないはずのパスワードスーツ、IS<インフィニット・ストラトス>の前提を覆すこの状況。

そもそもの発端は、世界で初めてのIS操縦者・織斑一夏が発見されてから急遽行われた男性へのIS起動調査だ。織斑一夏以外にもIS適性を持つ者がいないかどうかの実験。一夏と比較的年齢や体格など条件に近い者を対象として行われた。

そうしたら出るわ出るわ。……………実に30名もの適合者が発見されたのだ。それも全て日本で。

結果、紆余曲折あったものの、この男性IS操縦者30名は追加でIS学園へと編入することとなったのだ。

(どうしてこうなった!?)

先程自己紹介を終えた小野田幸人は、次に自分の後ろで自己紹介を始めた織斑一夏を眺めながら心の中で盛大に叫んでいた。勿論、表情には出さないように気を付けながら。

あの日、藤原の家で気を失った僕たちが目を覚ました後、世界は一変していた。

別に日本が剣と魔法の世界に変わっていたとか、異世界に使い魔として召喚されたとかではない。

藤原の持っていたISのラノベがなくなっていた事以外で部屋の中に異常はなかったし、自分の家に帰ってみても普通にそのまま。家族も変わりなかった。

だが、その認識はテレビのニュースを見たことで覆される。

『世界で唯一ISを使える男が発見される!?!』

ニュース番組のテロップにはそう書かれていた。織斑一夏という少年が女性にしか使えないはずのISを起動したという内容だった。……本来、創作物の中でしかなかったはずのそれが当然のように世界に存在し、報道されていたのだ。

この状況を異常だと感じていたのは僕と藤原だけだった。

家族や友人にそれとなく聞いてみても、分かるのはISは10年前に開発されて現在では当たり前前のように存在しているという“事実”だけ。

教科書を開いてみれば当然のように『白騎士事件』のことが載っている。ネットを調べればIS関連の情報が次から次へと出てくる。現行の戦闘兵器はISの前ではただの鉄クズに等しく、それ故に

世界の軍事バランスは崩壊。ISの取り扱いを決めた『アラスカ条約』が結ばれ、軍事利用の禁止が決められた。

そして世界は女性優遇の制度が施行され、徐々に女尊男卑に移り変わっていると……。

混乱した。

まるで別世界に迷い込んだ気分だった。いや、むしろ完全な異世界であった方が気は楽だっただろう。

だが家族に変わった様子もなければ、通っている学校や友人もそのままだ。そして、この世界には小野田幸人と藤原恵一という人間は過去から現在まで連続して存在している。……僕と藤原だけがインフィニット・ストラトスの世界に迷い込んだ、なんて訳でもないのだ。

なのにISが 篠ノ之束や織斑千冬、織斑一夏が存在しているという歴史だけが違っている。

藤原がふざけて、「誰かがもしもボックスでも使ったのか？」と言ったのに頷いてしまいそうだった。あるいは月島さんの完現術で過去を差し挟まれたらこんな感じなのだろうか。

啞然としたまま何もできずに過ごした、その数日後。

急遽、全国で行われた男性のIS起動調査。その検査で僕と藤原はISを起動できたばかりか、IS適正でA判定を出してしまった。

正直に言つて、戸惑った。

『原作』ではISを起動できるのは『主人公』の織斑一夏だけなのだ。それも篠ノ之束の仕業であると原作で仄めかされている。

なのに、何故僕たちがISを使えるのか……訳が分からない。

この結果が出てから僕と藤原の自宅には自衛隊の高官だの政治家のお偉いさんだの、果ては各国大使や遺伝子工学やらIS研究所の

ヤバそうな科学者たちがこぞってやってきた。

そこで僕たちはISのことについて学ぶため、何よりも身の安全を確保するためにIS学園に半強制的に入学することとなったのだ。身の安全といったが、それには自分だけでなく家族の安全も含まれている。男のIS操縦者の家族ともなれば、脅迫の人質やデータを得るのための実験など、利用価値は腐るほどあるからだ。

まあ、色々としリアスなことも言ってしまったが、本音を言うところワクワクしている部分もあった。

創作上の存在でしかなかったインフィニット・ストラトス。その操縦者としてIS学園に行くだなんて、まるでよくある二次創作の主人公（オリ主）のようであるからだ。

それにロボットは男のロマンだ。下を向いて愚痴ばかり吐いても仕方ない、少しは前向きに考えなくてはいけないだろう！

専用機とかは貰えるのだろうか？ 貰えたら待機状態とか、機体のカラーリングとかカスタマイズできたらいいなあ……。

「と、気楽に考えているうちは良かったんだけどなあ……」

一夏が見つかり、僕たちが見つかり、そして4人目、5人目、6人目、と男性IS操縦者が次々と見つかったのだ。

この時点でインフィニット・ストラトスの原作は崩壊したと言っている。……まあ、自分達がいる時点で原作もクソもあったものじゃないんだが。

そして僕たちが入学して初めて顔を見合わせたその瞬間、電流が走るッ！ エフェクトを入れるならニュータイプのキューピーンという演出だろうか。

っーかアレだ。こいつらほぼ間違いなく僕たちと“同類”だ。同

郷だ。

「というか、なあ……？」

「（ISの二次創作では二人目の男性IS操縦者、つまりはオリキヤラが出てくる作品は多いが、……いくらなんでも多すぎないか？）

IS <インフィニット・ストラトス>

第1話 「クラスメイトは全員男（一夏以外の男子全員トリツパ

「（
はじまりません。

1話（後書き）

筈は2組なのでいない。

セシリアは2組なのでいない。

その他女子も他のクラスなのでいない。

一夏以外の男子全員原作知識持ちトリッパ―

ISの二次だと二人目のIS操縦者のパターン多すぎね？ 全員集めたらすげえ数になるぞ？ という友人の言葉から思いついた一発ネタ。

2話(前書き)

続いてしまった。

2話

「さあ、これでSHRは終わりだ。私は男のIS操縦者だからといって特別扱いはしないぞ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらおう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませる。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

1年1組のクラス担任、織斑千冬がそう言うと男子生徒達は全員返事をした。すごい迫力だ、まさに鬼教官。

流石は元日本代表にして『モンド・グロツソ』第一回優勝者、公式試合で無敗を誇る　　というか原作では強すぎて作者が扱いに困った結果死亡フラグが立つくらいには最強なのだ。

とまあ、それからSHRが終わって1時間目のIS基礎理論授業も終わった。

ちなみに自己紹介は織斑一夏の番で途切れることもなく、全員が終えていた。……注目されていたとはいえ、クラス全員が女か男かの違いは大きいらしい。無難な内容だった。

「しかしアレだな、やっぱり俺たちって注目されてるんだな」

「良い意味でも悪い意味でもね。……動物園のパンダの気持ちがよくわかるよ」

藤原の言葉に僕は答える。

クラス全員が男とはいえ、IS学園は本来女子生徒しかいないのだ。つまりどういふことかと言つと、

「これじゃあ外に出れないな」

「なんであんな廊下に張り付いてるんだろ……トイレいけないじゃん」

現在、廊下には他のクラスの女子、二、三年の先輩らが詰めかけている。しかし男だらけのクラスに突入する勇気はないのか、入口からこちらを眺めているだけだ。それがまた居心地の悪さを助長させる。

「うーむ……」

教室を見渡すと男子のとる行動は様々だった。一人ケータイを弄っている者もいれば、すでに何個か出来あがっている各々のグループで話している者もいる。ぼーっと空を眺めている奴や、黙々と教科書を見てノートを広げている奴、文庫本を読んでいる奴と様々だ。

そして我らが主人公、織斑一夏と言えば……死んでいた。いや、本当に死んでいるわけではないのだが、なんか雰囲気というか、覇気の無さがそう感じさせる。自分の机でうつぶせになってぐったりとしている姿は実に情けないというか、哀れを誘う。

その時、教室の内外がざわめいた。

「……ちよつといいか」

見れば、一人の女子が教室に入って一夏に話しかけているのだ。

「なあ藤原……あの子って」

「ああ、間違いない」

周りには聞こえないように、藤原と小声で話す。

肩下まである髪を結ったポニーテール。身長は平均的な女子のそれだが、背筋はピンと伸びており、その姿勢の良さ故かどこか長身

を思わせる。まるで刀のような剣呑な印象を与える眼つきの悪さ。

インフィニット・ストラトスのメインヒロインにしてISの開発者、篠ノ之束の妹　篠ノ之箒（おしほ）だ。

しかしまあ、男だけのクラスに入ってきたとは勇気があるな。

二人は二言三言話すと、廊下へとすたすたと行ってしまう。その後姿を眺めつつ、僕らはチャイムが鳴るまで四方山話で暇を潰していた。

パァンツ！　「とつとと席につけ、織斑！」

廊下で何かが炸裂する音が聞こえた気がした。

「　であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ」

すらすらと教科書を読みあげていく山田先生。しかし何だアイエス、IS<インフィニット・ストラトス>のヒロインは割と気軽にISを部分展開したり、ISを使って一夏を“オシオキ”していたが、それは枠内を逸脱したIS運用ということにはならんのだろうか？

……多分、深く考えちゃいけないことなんだろうな。

目の前の机には分厚い教科書が5冊も積まれている。……これがISを使うために覚えなければいけない基礎知識だと言うのだからうんざりしてくる。

流石に入学までにすべてを覚えることは不可能だったが、それでも理解できるように努力はしてきた。努力した、というだけで理解した訳ではないのだが。それでも授業に置いて行かれないように最低限のことはしなくてはならない。山田先生の言葉を聞きながらノートを取っていく。

表向きISの戦争利用は禁止され、今ではスポーツへと変わってはいるものの、ISが強力な兵器であることに変わりはない。ISがあれば現行の兵器をただの鉄クズへと変えてしまうことができるのだ。……それに、内紛やテロは『戦争ではない』。抜け道はいくらでもあるのである。

それだけでなくIS学園でのイベントには危険がいっぱいなのだ。無人機とか無人機とか束の作った無人機とか。あとは亡国機業ファントム・タスクとかいう、ヤバいんだかシヨボいんだかよくわからん悪の組織(?)もいるらしい。

(しかし、普通の女子はこれ全部を事前学習してきてるんだよな)

普通に正規の手段でIS学園に入学しようとするれば、その難易度はとても高い。つまりこの学園の女子生徒全員がさまざま倍率の中を勝ち抜いてきた優等生なのだ。

調べたところによると、IS学園に入学するための事前学習としてIS学習を授業に組み入れている学校は多いらしく、そしてその学校は100%女子高。

(作中で女尊男卑がどうとか、女が男に対して偉そうにしてるとか言っただけだよ……)

織斑一夏が電話帳と表現したその教科書。世の女性たちは憧れのIS学園に入学することを夢見て、この電話帳と何年にも渡って格

闘するのだ。

入学前に事前配布された参考書。もはやそれは中学生が勉強するレベルの問題ではなかった。父親に見せると、大学かそれ以上のレベルの難解な数式もあると言っていた。

……この世界、男女間の知識水準に大きな開きがあるよな。絶対に。

初めからISを使えないと分かっているため、普通の教育しか受けない男。

女性なら誰でも懂れるIS学園に入学するため、IS学習やハイレベルな教育を受ける女。

もちろん個人差はあるだろうし、学力と仕事の出来などが直接関係するとは限らないのだが、ぶつちやけて言ってみればアレだ。

男は馬鹿が多くて、女は頭がいい人の方が多い。これがIS世界の男女の格差だ。

「織斑くん、何か分からないことがありますか？」

聞こえてきた山田先生の言葉が思考を遮った。どうやら、頭を抱えていた織斑一夏の様子を見るに見かねたらしい。

「わからないところがあつたら訊いてくださいねくださいね。なにせ私は先生ですから」

えっへんと、まるで子供のような態度で山田先生が胸を張る。だぼつとした服装や童顔な顔が子供っぽさにますます拍車をかける。

「先生！」

後ろの席の一夏が勢いよく挙手をして立ち上がる。……いきなり大声を出すからちよっとびっくりした。

「ほとんど全部わかりません！」

「は……え……？ ぜ、全部、ですか………？」

そのあまりにもあんな言葉に、山田先生の言葉が引き攣る。

「え、えっと……織斑くん以外で、今の段階で分からないっていう人はどれくらいいますか？」

山田先生の問いに、何人かの生徒の手がぱらぱらと上がる。それを見て、山田先生の顔がさらに困惑で彩られる。

逆に一夏は仲間を見つけたことで安心した表情になった。

「えっと、あの……新垣くん、梅原くん、野々宮くん、森谷くんですか……。どこが分からないとか、言えますか？」

「……その前に織斑、入学前の参考書は読んだか？」

山田先生が挙手した生徒に聞いてみるが、その前に織斑先生が遮る様に一夏に質問した。

「古い電話帳と間違えて捨てました！」

パンツ！

「必読と書いてあったろうが、馬鹿者！」

先生の鉄拳が炸裂し、一夏の頭を粉碎するような音が響いた。……まあ、自業自得かな。ここは原作読んで本気で馬鹿かと思っ
たし。てか間違っ
て捨てたのがわかってるのなら素直に再発行して
もらえよ。これじゃあ馬鹿と言われても仕方ないよ？

「あとで再発行して貰うから1週間で覚える。いいな……」

「い、いや、千冬姉……そんな無茶苦茶な、」

パンツ！

「今は織斑先生だ。公私をわきまえる」

「ぐおおおおお！？ な、なんで俺ばっかり……他の奴らは……？」

織斑先生がギロリと睨みを効かせ、出席簿をチラつかせると一夏は大人しくなった。

「新垣、梅原、森谷の三人は直前のIS起動検査によってIS適正ありと判明した。織斑のように入学まである程度の事前学習の時間があったわけではない。特に梅原は31人目……参考書も入学の数日前に渡されたそうだな」

「はい」

織斑先生の言葉に、梅原と言われた小柄な男子が返事をする。平均よりも低い身長の子供か他のクラスメイトより子供っぽい印象だが、その身体つきは決して華奢ではない鍛えられたものだ。スポーツか格闘技でもしているのだろう。

そも、男性を対象にしたIS起動検査が行われたのは織斑一夏が発見されてからだ。つまり、僕は全員一夏よりも後になってIS学園への入学が決定したことになる。時間的余裕で見れば、本来は一夏が一番アドバンテージを持っていた訳だ。

「そして野々宮、お前については事前に報告を受けている。入学までは自衛隊のIS部隊で検査潰けだったそうだが……」

「ええ。起動実験などで基本動作などの実習面はある程度学んでいますが、知識はほとんどありません。IS学園で学んで来るように言われました」

野々宮という男の第一印象は、なんとというか気難しそうな奴だった。鼻筋の通った顔、ややつり上がった目に銀フレームの四角い眼鏡、背はひよろりと伸びて高い。いかにも生真面目^{オーラ}そうな雰囲気だ。そんな野々宮の言葉に、織斑先生はふむと一度だけ頷いた。

「いいか貴様ら、ISはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遥かに凌ぐ。そういつた『兵器』を深く知らずに扱えば必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解ができなくても覚える。そして守れ。規則とはそういうものだ。

手を挙げなかった者達も、『自分達はもう知っているから』などと甘い考えは持たないことだ。分かったか」

最もな話である。ISの立ち位置は、その安全性と国家間のパワーバランスが均衡したことで微妙な緊張状態の上にある。……入学前に調べた情報だと、一般人の中にはISを兵器ではなくスポーツやブランドのファッションのように認識している人もいるのだが……。

織斑先生は一旦言葉を区切ると、もう一度一夏の方を向いて言う。

「……貴様、『自分は望んでここにいるわけではない』と思っているな？」

その言葉に、後ろの一夏が明らかにうろたえる様子が雰囲気分

かった。

「望む望まざるにかかわらず、人は集団の中で生きなくてはならない。それすら放棄するなら、まず人であることを辞めることだな。……これは織斑だけに言っているのではない、お前たちクラス全員に言ってるんだ。肝に銘じておけ」

取りつく島もないとはまさにこのことか。辛辣な、…だが正しい言葉である。

ま、この台詞に篠ノ之束は該当しないんだろうけどね。集団どころか、あの天才が認識できるのは千冬、一夏、篝の3人のみ。彼女にとって世界とは、自分の作った玩具を遊ばせるための箱庭ではないだろう。人間やめてるような頭脳してるし。

机に落としていた視線を戻すと、教卓の前で山田先生が何やら頬を赤らめていやんいやんと悶えているところだった。

一夏がまた何か言っつて、それを聞いてまた変な妄想を始めてしまつたらしい。……不安だ、……果てしなく不安だ。

この時、クラス全体の心は一つになつていただろう。すなわち

『……大丈夫か、この先生で……』

元日本代表候補生つてのは知ってるんだが、この姿を見せられるとどうもなあ……。。

3時間目。実践で使用される各種装備の特性に関する授業である。

ちなみに2時間目が終わった後に現れるはずのちよろいさん……じゃねーや、セシリアイベントは起こらなかった。

流石にわざわざ別のクラスから男だらけの1組には踏み入ってこれなかったということなのか。それともさっきの一夏の馬鹿発現を聞いてないと「ISのことではわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくなってよ！ オーホホホホ！」という台詞は出ないのだろうか。ちよつと残念。背景に薔薇をしょって登場してくるかと思ったのに。

「授業の前に、再来週に行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めておく。自薦他薦は問わないぞ」

教壇の上に立っているのは、山田先生ではなく織斑先生だ。

「千冬ね……お、織斑先生。代表者ってなんですか？」

思わず千冬姉と言いかけたが、先生の鋭い視線を向けられた一夏はすぐさま言い直す。

「クラス代表とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……まあ、クラス長も兼ねているな。ちなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。急にIS学園への入学が決まった諸君らはともかく、他の女子生徒たちは今の時点ではたいした差はない。だが、競争は向上心に繋がる。一度決まると1年間変更はないからそのつもりで」

ざわ……ざわ……、教室のあちこちでざわめきが起こる。クラス代表をどうするべきか、皆考えているのだろう。

原作通りならば唯一の男性IS操縦者ということで織斑一夏が推薦され、それにセシリア・オルコットが反発し、そこからは売り言葉に買い言葉。激昂したセシリアによって決闘することになるのだが……。

「比良坂くん、……立候補ですか？」

しばらく誰も自薦も他薦もしなかったところで、すっと手が挙がった。山田先生の言葉に、自然とクラスの目線も彼に集まる。

「あの、その前に質問したいのですが。織斑君に専用機が与えられると噂で聞きましたが……本当ですか？」

手を挙げたのは、抑揚のない声で喋る顔色の悪い男子だった。髪は脱色したか染めているかのような亜麻色だがボサボサで、眉や睫毛の色も同じである所を見ると地毛であることが判る。

「……どこでそんな噂を聞いたかは知らんが、事実だ。学園側が専用機を用意するそうだ」

織斑先生の言葉に「おお」とどよめきが起こる。かくいう僕もその一人だ。

31人も男がいるこの状況で一夏に専用機が与えられるか不安だったが杞憂だったようだ。きっと最強無敗の織斑千冬の弟であり、篠ノ之束が認識している数少ない人間の一人というのも関係しているだろう。というか白式は束が作ったんだっけか？ なら結局、白式は絶対に与えられるんだろうな。

「え、えーと……つまりどういうことなんだ？」

まったく意味が判らないという顔をしているのは一夏だけだ。これだけ情けない顔をされると、……見るに堪えられないね。

「ほらここ。6ページ」

振り向いて、後ろの席の一夏に広げたページを見せてやる。……何気に今初めて一夏と話した。

「ん、なにに……」『現在、幅広く国家・企業に技術提供が行われているISですが、その中心たるコアを作る技術は一切公開されていません。現在世界中にあるIS467機、その全てのコアは篠ノ之東博士が作成したもので、これらは完全なブラックボックスと化しており、未だ博士以外はコアを作れない状況にあります。しかし博士はコアを一定数以上作ることを拒絶しており、各国家・企業・組織・機関では、それぞれ割り振られたコアを使用して研究・開発・訓練を行っています。またコアを取引することはアラスカ条約第七項に抵触し、すべての状況下で禁止されています』……」

「そういうことだ。本来ならば国家か企業に所属する人間にしかIS専用機は与えられない。が、お前の場合は状況が特殊だ。データ収集を目的として政府から専用機が用意されることになった。どうだ、理解できたか？」

「な、なんとなく分かったけど……それなら俺以外にも適任がいるんじゃないか？　なんで俺が……」

「知らん。お前が最初に発見された男だったからか、それとも……。……その辺りのことは政治家や企業の連中が判断することだ」

織斑先生の言葉に、一夏は納得したようなしていないような、なんとも微妙な顔をしていた。

「比良坂、これで満足か？」

「はい。だったらボクは専用機持ちの織斑君を代表に推薦します」

「あ、それいいね。じゃあ俺も織斑ちゃんを推薦しまーす！ 織斑先生の弟みたいだしさ」

「自分も……それがいいと思います」

「異議なし」

おお。じつに自然な流れで一夏がクラス代表者になるような空気になってる！？

クラスの皆も納得がいったかのような表情で次々に織斑を推薦しました。

「では候補者は織斑一夏……他にはいないか？ 別に自薦でもかまわないぞ」

「お、俺え！？」

素っ頓狂な声を出しながら、一夏が立ちあがった。そして彼に向けられるクラス中の視線の嵐。もし目からビームが出せたなら、一夏の身体は今頃穴あきチーズになっているだろう。

「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？ いないなら無投票当選だぞ」

「ちよつ、ちよつと待った！ 俺はそんなのやらな」

「自薦他薦は問わないといったはずだ。推薦を受けた以上は拒否権などない。選ばれた以上は覚悟しろ」

「い、いやでも あ、あああ！！ ほ、他にいるじゃん！
ほらそこ、手を挙げて、」

パァンッ！

「やかましい！ ……野々宮。自薦か、それとも他薦か？」

織斑先生が当てたのは、あの野々宮という眼鏡くんだった。相変わらず真面目で真剣そうな表情だ。

しかし、このままいけば原作通りに一夏が代表者になれるのにとうするつもりだ。まさかセシリアポジションにでもなるつもりか！？ み、見たくね……。……。

「自薦と他薦、両方です。私自身と入江優助、早乙女大地、織斑一夏。そして、この合計四名の専用機持ちで模擬戦を行い、それによるクラス代表の決定を提案します」

「あ、……オレっすかあ？」

「なんだって!？」

野々宮の言い放った言葉に、サングラスをかけた男子と大柄な男子が反応し、続いてクラス全体が驚愕する。

「とうかさあ……。……。」

「な、なんで専用機持ちが三人もいるんだあ!？ 僕だって専用機が欲しいってのに! つかどんな裏技つかつたの!？ トリップパー特典? スゲー、すげえうらやましいいいいい!!」

と、織斑先生のお叱りが怖いので声には出さないが心の中でしっかりと叫んでおいた。

2話（後書き）

2話目にしてオリキャラがかなり増えたので整理。
つか30人もオリキャラ出すことが無茶だったことに今更気が付いた。読者絶対覚え切れねーよ。

・小野田幸人おのだゆきひと

解説役。オリ主。ISの原作知識はアニメ全話と原作1巻、それとWiki。二次創作から逆輸入でISを知った。
トリッパー。

・藤原恵一ふじわらけいいち

幸人の友人。ISの知識は原作を全巻。
トリッパーその2。

・野々宮明ののみやあきら

気難しそうな真面目くんオーラを出してる眼鏡っ子。何やらIS適正が判明してからは自衛隊にいたらしい。
幸人の勘が間違いなくコイツはトリッパーだと言っている。

・早乙女大地さおとめだいち

小麦色の肌の健康的なマッスル。野々宮曰く専用機持ちらしい。
ほぼ間違いなくトリッパー。

・入江優助いりえゆうすけ

グラスンをかけた軽薄そうな男。野々宮曰く専用機持ちらしい。
モッピー知ってるよ、コイツがトリッパーだったこと。

・比良坂ひらさか

なんか常に顔色の悪い亜麻色の髪の男。
お前もトリッパーだろうな。

・新垣 あらがき 梅原 うめはら 森谷 もりや

授業が分らないといって手を挙げて一夏を安心させた。
一夏以外の男子生徒は全員トリッパー！

3話

放課後。授業も終わり、寮での夕食も終わり、時刻はすでに10時前。窓の外は真つ暗闇で染まっている。

そんな時間にも関わらず、電灯で明るく照らされた教室が一つある。

プレートを見ると、そこは1年1組だった。IS学園では例外的な、男子生徒だけのクラスである。

その教室には織斑一夏を除く30人の男子が集まっていた。その名目は自主勉強。本来ならば規則違反となる時間だが、「女子に比べて遅れた部分を取り戻すために勉強したい」と言って学園側に申請して特別許可を貰ったのだ。

生徒たちは互いに複数の教科書を広げて見比べたり、ひたすら参考書をノートに書き写していたり、授業のレポートのようなものを作成していたり、端末で何かの単語を調べていたりと何だか異様な光景だ。

黒板の上のデジタル時計が示す時間が9時59分から10時に変わる。

パタン。

それを見た二人の生徒が教科書を閉じると、スタスタと歩いて教壇の上に立った。さらにもう一人が席を立ち、懐から小さな装置を取り出した。携帯電話に似ているが、それよりも一回り小さい何かの端末のようだった。そのスイッチを入れると教卓の上に置く。それは、盗聴器やカメラなどの機器を妨害する特殊なジャマーだった。仮にハイパーセンサーなどで外から声を拾っても集音できないようになっている。

そして廊下側、扉の近くにいたそれぞれ前列と後列の生徒がガチャリと中から鍵をかける。

「では、これより会議を始めたいと思います。司会進行はこの僕、小野田幸人が。議長は藤原恵一で。…くれぐれも和やかで適切な議事進行を心がけてください」

小野田幸人の言葉に、ペチペチとやる気のない拍手が答えた。すでに勉強をしている男子はいない、皆がこの“会議”に集中していた。

「今回の議題は“僕らの現在の状況の確認と原作介入をどうするか”です。何か意見のある人」

彼ら30人は全員がトリッパーと呼ばれる、IS<インフィニット・ストラトス>というSFアクション学園ラブコメ作品を知る者達だ。

……普通、そんなことは常識的に考えればありえないことだ。単なる創作上の世界に迷い込んだなんて、頭がおかしくなったとしか思われないだろう。

しかし、彼らはそれが起こったことを確信せざるを得なかった。理由は分からない。だが分かるのだ。コイツ等はトリッパーだと出会った瞬間に理解した。なにせ、互いが互いの証人だ。

ここに30人が集まるのが、トリッパーの存在とお互いの認識を何よりも証明してしまった。

「あの、その前に聞きたいんだけどさあー」

「発言は拳手の後にするように。……えっと、新垣か？ 何だ？」

トリッパー活動会議・議長の藤原が新垣を指す。

「天災博士たばねのコネがある一夏はともかくとしてさ、何で専用機持ちが3人もいんの？いくら俺たちトリツパーが男なのにISを使えるつつつても、30人もいるとISコアは貰えないと思ってたんだけどなあー」

それは、ここにいるほぼ全員が感じていた疑問だったのだろう。自然と全員の視線は専用機持ちの3人の方へと向く。

ややつり上がった目に銀フレームの四角い眼鏡。真面目そうな印象を人に与える男 野々宮明。

サングラスをかけた、言い方は悪いが少々軽薄そうな男 入江優助。

がっしりとした肩幅によく日に焼けた浅黒い肌。かっこいいというより逞しいという言葉が似合う容貌の男 早乙女大地。

「そうだね。それは僕たち全員が感じている疑問だと思う。……説明してもらえるかな？」

小野田がそう言うと、三人は互いに顔を見合わせ 野々宮が一歩前に出た。

「今日自己紹介したと思うが、野々宮明。君たちと同じ境遇だ。そして専用機を持っている理由だが……、」
「やっぱりさ、織斑先生が言ってた自衛隊にいたってというのが関係してるのか？」

遮るように誰かの質問が飛ぶ。話の途中に割って入られて、野々宮の顔がやや不機嫌に歪んだ。それを見た藤原が男子を窘める。

「……その通りだ。IS適正が発覚してからの一ヶ月と半月の間、日本のIS部隊と研究所で検査漬けだった。ハイパーセンサーとのリンクデータや脳波測定。各種ホルモン検査に女性親族の遺伝子データとIS適正の確認。血液検査や使用したISの変化、フラグメントマップの構築状況の確認……あとは覚えてないが、まあ色々だ。IS学園の生徒は在学中にありとあらゆる国家・組織・企業に所属しないことになっているが、私は外では自衛隊のIS部隊の所属となっている。専用機が与えられたのもそういう背景がある」

野々宮がそう話終わると、クラスメイト達から関心の息が漏れる。楽しんで専用機を手に入れようなんて考えが甘いことは自覚しているが、一ヶ月以上も検査漬けというのは精神的にもキツかっただろうに。しかも所属が自衛隊。もう将来が決まっているようなものなのだ。

「いや、なんつーか……すげーな」

「自衛隊かあ。俺、そういう訓練とか肉体労働とか無理だから尊敬するよ」「いや、そこは頑張れよ」「そーいや学園の授業でも体鍛える内容があるんだっけ？ うわあ……どうしょ」「俺だつて3年間帰宅部のインドアだぜ？」「オタクだもんな」「うっせえ」

「実験とか検査とか、変なことはされなかったのか！？ あと、どういう経緯でそうなったのか詳しく」

ざわざわと思いいいに勝手な事を喋るクラスメイトたち。トリッパーといえども、彼らはまだまだ子供なのだ。

別に死んで転生して神様に能力を貰って云々なんて又ルイ人生、強くてニューゲームだったわけではない。全員が全員、気が付いたら世界にはISが存在しているということになっていたのだ。それも家族や友人はそのまま。ただ、世界はISとその登場人物が存在している女尊男卑社会に変わっていた。だからこそ、オリ主だチー

トだと変に勘違いしたりしなかったのだが。

「静かに！ 発言は拳手の後にするように。野々宮、自衛隊での検査とか経緯とか、話せる範囲で話してくれないか？」

「……連日の検査は確かに精神的に辛いものだったが、特に非人道的な実験はされなかったさ。だが外国の機関でも同じとは限らない。それとこうなった経緯は……詳しくは省くが、祖父が元軍人で父親が自衛官だからだ。

勘違いしないで欲しいのは、だからといって親に強制されたわけじゃなく、この道を決めたのは自分の意思だったということだ。……単に専用機が欲しかっただけと言われたら否定はしないが」

それ以上は野々宮は喋らず、クラスメイトたちも深くは追求はせずに終わった。

「ハイハイハイ！ んじゃあ次はオレだな。オレはデュノア社、つまり企業の所属になってるから専用機を持つてんだ。以上！」

それまでの空気をぶち壊すかのようにあっけらかんとした口調で言ったのはグラスアン野郎……入江だった。

「ちょ、おま……」「はしよりすぎだろkws k」「デュノア社つてどういうコト？」「シャルは？ まさか登場しなくなったりしないよな！？」

ざわざわざわ……、^{トレットパー}男子たちが一斉に騒ぎだす。

スパパアーン！

「お前らええかげんにせえや！ 話が進まんやろが！」

どこから取り出したのか、額にバンダナを巻いた男子の巨大なハリセンによるツツコミが炸裂する。

「あー、代弁ありがとう里中。んで入江エ、もうちょっと詳しく話すように」

いくらなんでも短くまとめすぎだと、藤原は額を押さえる。

入江も最初からそう言われることは分かっていたのだろう、全員に聞こえるように立ち上がると口を開いた。

「まあ、オレがやったことはデュノア社に自分を売り込んだってこと。」

IS適正が判明したのが2月。そんな時にはもう何人目かの男が見つかってたからさ、これじゃあ専用機が貰えないかもしれないって思ったわけよ。

でー、だったら政府が企業の所属になって、データ収集の代わりに専用機を頼めばいいか ってな」

「何でデュノア社を選んだんだ？ どうせなら第三世代を開発している国が企業にすべきだろう」

小野田の質問は尤もなものだった。原作では、デュノア社の作った第二世代型ISの『ラファール・リヴァイブ』は傑作機と呼ばれるほどに完成度が高い。だが、第三世代ISの開発は難航しておりその経営状況はよろしくない。むしろ経営危機に陥っている。

具体的には、シャルロットを男装させて広告塔にした拳句に白式のデータを盗むためにIS学園に『男』として送り込むぐらいには。

……どう考えても穴だらけの計画である。1日でバレてるしさ。馬鹿じゃねえの。

「わかってないな。だからこそだよ」

入江はチツチツチとわざとらしく指を振ると、サングラスをキラリと光らせる。…ウゼエ……。

「第三世代の開発で遅れているデュノア社なら、特異ケースであるオレのデータ収集を条件に取引しやすくなるだろ？ ISが使える男のデータなんてどこも欲しがらるうし。契約の条件も良かったし！」

まあ、おかげでオレも野々宮みたいに入学までデータ取りの毎日だったんだけどさー。いやホント。原作だと馬鹿な企業っぽい印象だったからちよろいと思っただけだな」

ちなみに現在デュノア社は入江優助のデータ提供を条件に各国のIS企業と渡りをつけ情報交換を行い、ドイツのレーゲン型・イギリスのティアーズ型・イタリアのテンペスタ？型の技術を応用した第三世代型ISの開発を行っている。開発は順調だそうだが、それでも完成はしていない。入江の持つ専用機は第二世代型。ラファール・リヴァイブの専用カスタム機らしい。

「……………で、シャルロットは？ お前のせいで原作より不幸なことになってたら容赦しねえぜ…………？」

話を聞いたトリツパーたち中の一人、シャルロット党の森谷が剣呑な表情で入江に凄む。

その言葉を聞いて、他の面々もはっとしたように入江を見た。

「お、おいおい落ち着けつて。シャルロットちゃんなら、普通に代
表候補生としてIS学園に入学してるぜ。確か2組だったはずだ」
「シャルロットちゃんんんん！！？？ なんだかずいぶんと親し
そうじゃないか、さあ吐け！ すぐ吐け！ 今吐け！ どういう関
係だ！？」

「あー、いや。テストパイロットをしてる間、ISの使い方とかち
よつと指導してもらったただけだつて。後はその、……デユノア社か
ら俺のサポートというか、……命令でも受けてるんじゃない、かな
？」

「その話、」

「詳しく、」

「聞かせてもらおうか……！」

わきわきと手をゾンビのように動かしながら迫るシャルロット党员。
話される内容によっては嫉妬団にジヨグレス進化するだろう。

そして、

スパパパパーン！！

唸るハリセン。叩かれる男ども。

「はいはい。同じ事二度も言わせんなや。学習しないやつちゃなー」
「すまんね、里中」

なんだか織斑千冬のツッコミと同じポジションを獲得しつつある
男、里中。ツッコミにキレがあるが、出身地は大阪だろうか？

「……今話を聞いて気になったんだけどさ、原作のヒロインたち
ってどうなってるんだろっ……」

ぼつりと、思いついたように小野田が呟いた。

「シャルロットちゃんは2組だし……」

「一夏と話した後、筭は2組に帰ってたな」

「セシリアも2組だったはずぞ。あの特徴的な外見は間違いねーよ」

「鈴は？」

「2組だけどいない。 てか、まだ転校してきてないやろ」

「ぬう……無念」

「ラウラもまだ来てないしなー」

「会長は？」

「しらねーよ。てか誰だよオリキャラ？」

「あ、もしかしてアニメしか知らない？ 原作5巻で登場した2年の生徒会長だよ」

「その妹さんもアニメには出てないっすね」

「マジでか……どんだけヒロイン増えるんだよ……」

「信じて送り出した代表候補生が一夏の魅力にドハマリしてアへ顔ピースビデオレターを送ってくるなんて……」

「ごめん。元ネタわかんね」

「その内学園の女子全員が一夏に陥落したりして……！」

ざわ……。

ま、そんなことは置いといて。

「最後は早乙女だね。やっぱり、国か企業に？」

二人の事情は分かった。最後はこのマッチョメンである。

「おお、やっと俺の番か！ といつても、大体のことは二人が喋っちまったからあまり言うこともないけどな。俺も入江と同じようにIS企業の所属だ。国はアメリカ……といつても日系企業なんだけどな」

アメリカ、という単語で多くのトリッパーが連想したのはあの機体 銀の福音だ。

IS本編には何故かアメリカの代表候補生が登場しないが、代わりに原作3巻、アニメで最後の敵として登場したのが銀の福音シルバリオ・ゴスペルだ。

学園行事がごとごとく潰される運命にあるIS学園だが、中でもこの事件は一夏の成長に欠かせないイベントであり、強敵であったと言える。

「アメリカというと、銀の福音やフアング・クエイクを想像するんだが……」

「いや、その二つとは無関係だ。そっちは政府開発の軍用機。俺のは企業が違ってみたいだ。原作じゃあ登場してない企業……二次創作でいうオリ企業ってことになるのか」

「身も蓋もないことを言うな」

早乙女曰く、アメリカにある日系企業であり兵器メーカー。ただし、IS開発によって生まれた技術を流用した民間関係の受注のほうが多いため、必ずしも軍需産業とは言えないんだとか。……ISの登場は、兵器だけでなく様々な分野にも革命を起こした。分かりやすいところで言うと医療用ナノマシンや義肢技術などがそれに当たる、らしい。よくは知らない。

早乙女もやはり専用機の所持や身の安全を条件に家族と共に交渉に行ったらしく。その後はデータを取る為にずっとIS研究所に籠もりきりだったという。月に一度の戦闘データの提供や報告書の作成なども義務付けられているとか。

「あゝあ……なんていうか、3人ともちゃんと考えて行動してんだな。……はあ……」

「なんだよ橋本？」

ため息を吐きながら、急にがつくりとした様子で橋本が頂垂れるのを見た藤原が続きを促す。

「俺の考えが甘かったっていうか、ISを動かせるっただけで浮かれてた自分が恥ずかしくなってきたっていうか。……だって俺には無理だよ。企業とか大使館の人の誘いも内心「めんどくさいから」って断っちまったし。IS学園に来たのだって、主人公みたいな境遇になれば変わるんだって思いあがってただけだし。努力なんて嫌いだし。専用機のこと、自分は特別なんだから勝手に用意してくれらんだと勘違いしてたんだ……。無理だよ、俺じゃあ……」

「……橋本……」

話している内にヒートアップしてきたのか、その口調は荒々しくなり、やがて激しい自己嫌悪へと変わっていた。

その落ち込む姿を見て、彼らは何も言えなかった。それは、橋本の言葉の大部分が自分たちにも当てはまるからだ。

「い、今からでも遅くないだろ。男性操縦者の情報ならどこの企業も研究所も欲しがるだろうし、そうすれば専用機を貸し出すって国もいくらでもあるって！ ……なあ？」

「でも、交渉って言ってもどうやってやるんだよ……。相手は国とか大企業だろ？ 俺、そんな経験ないし、言葉で言うのは簡単だけどさ……」

「そ、それはだな……。なあ、野々宮。どうすればいいと思う？」

上手い方法が見つからず、トリッパーの一人がこの場で一番頭が良さそうな野々宮にすぎるような顔を向けた。

「……そのつもりがあるのなら、私よりも親や教師に相談したほうがいいと思う。ただ、この方法で専用機を持つということは、学園を卒業した後、一生をその国に所属する可能性があるということだ。私はこの世界に来る前から、将来は父のような自衛官になるか警察を目指そうと思っていたからいいが、君はそれでいいのか？」

「う……。じゃ、じゃあ入江や早乙女はどうだ？ 企業の所属になってるんだろ、どうすればいいと思う？」

「え、ああ……。やっぱりそこら辺は交渉次第っかなー。でも契約書はよく読んでけよ？ 死んだ爺さんが言ってたぜ。契約書ほど怖ええもんはないって。よく読まずにハンコを押すと、骨までしゃぶられることになるからな」

「まあな。男性の操縦者は30人……。織斑一夏を入れたら31人か。とにかくそれだけいるんだ。一人ぐらいは……。って考えで変な実験や強行手段に出る奴がいてもおかしくない」

返って来たのは、期待を裏切る厳しい内容だった。

結局その後の話し合いで出たのは、ISの実習や学園トーナメントなどで優秀な成績を修めれば、学園側やスカウトをしに来た者たちが勝手に専用機を提供してくれるのではないかということだ。わりと受け身な奴らである。

閑話休題。

「で、話を戻そうか。原作介入についてだけど……、」

ぱんつと手を打ち拍手を一つ。教壇に立った小野田が本来話し合
うはずだった議題に移る。

「織斑一夏がクラス代表になるはずだったわけだが、野々宮の提案
によって専用機持ち同士での勝負になっちまったな」

続きを受け取った藤原が野々宮と他の専用機持ちを見る。視線を
向けられた野々宮は 涼しい表情だ。

「別に問題はないだろう？ 私や他の誰かが勝ったとしても、何で
もいから理由を付けて辞退してしまえばいい。そうすれば織斑一
夏がクラス代表になる」

「それはそうかもしれないが、なんであんなことを言ったんだ」

野々宮は眼鏡をすつと持ちあげると、いたって真剣な表情で言う。
コイツ…… 中学時代は絶対に委員長とか生徒会長やってたタイプだ。
そんなインテリもどきの雰囲気がある。

「トリッパーである前に、私は専用機持ちとして少しでも多くIS
に乗ってデータを集める義務がある。経験も積まなければならない。
それにこれは織斑一夏にとっても悪いことではない。セシリア・
オルコットの変わりとまではいかないが、IS 戦闘の経験を積むこ
とができるはずだ」

話した内容には妙に説得力がある。トリッパーたちは納得したよ

うな表情になる。

「ん……まあ、それならいいか」

それまでは抜け駆け厳禁。勝手な介入禁止。そんなルールはないのだが、妙な暗黙の了解というか、空気が出来上がりつつあったのだ。

「でも皆好き勝手に言ってるけどさ、実際のところ、……ボクは原作とかどうでもいいよ」

「は？ どういうことや比良坂」

ボソリと呟かれた比良坂の発言を聞いていた里中が喰ってかかる。

「……言葉通りの意味だよ。確かにISは読んでいたけど、別に特定のキャラが特別好きだったわけでもないし、『物語』として好きだったんだ。……自分がこういう境遇になりたいとか、話の中に入ってみたって望みがあったわけじゃない……。フィクションとして読むから好きだったわけで……。」

だから原作に関わろうなんて気はないし、自分や家族に危険がなければ原作が変わっても、別にいいかなって……。」

抑揚のないボソボソとした声だったが、それは静かな教室では全員に聞こえていた。

「言われて見れば確かにそうだよな……。」

「でもさ、この世界って大丈夫なのか？ 亡国機業なんてシヨボい組織はともかく、束がラスボスだと勝てる気しないんだけど」

「そうそう、無人機が攻めてきて死人とかでたらどうすんの？」

「いやいや、ISでそんな展開ってありえないか？」

ドゴスッ！ バキンッ！ バリンッ！

『う、うわああー！？ ま、待てよ篤！ 落ち着けて！！』
『嫌い！ 問答無用ッ！！』

「……………ん？ 何か変な音がしなかったか？」

「気のせいだろ。早く寝ようぜ、じゃないと明日が辛い」

こうして、IS学園入学初日は終了したのだった。

3話（後書き）

専用機持ち3人は、ISが使えることが発覚してからは専用機を持つために積極的に動いてます。

何もせずにIS学園に来た人は専用機を持ってません。例外は一夏。

篤は2組なのでいない。

セシリアは2組なのでいない。

シャルロットは2組なのでいない。New!

やったね鈴ちゃん！ 2組の仲間が増えたよ！

ちなみに寮の部屋は二人一部屋。男子の人数は31人。余った一夏は篤と同室。

4話

空が白み始め、朝になり、夜が明けた。

早朝。IS学園のグラウンドには複数の人影があった。

「つ、疲れた……」

「無理。もう無理。一步も動けねえ……」

「……う、げほっ……はぁ……はぁ……」

荒い息を吐きながら、死んだように地面に寝転がる13名の男子。

「情けねえ。もうへばったのか?」

「そんなに走ったわけでもなし、筋トレにしても腕立て50回もできなйтとはな」

「ハハハ……流石に初日からはキツかったのかな?」

涼しい顔。あっけらかんとした様子でそれを見下ろす8名の男子。

「………なんでアイツらあんなに楽しそうなんだ……」

「勉強だと駄目駄目だったからな。運動部の本領発揮ってわけだ」

「知識だと女子には勝てないしな」。一夏ほど酷くはないけど、俺達も全然理解できてないし」

全身に汗をかき、息を荒げながらも心地よい疲れに身を任せている9名の男子。

織斑一夏を除いた男子合計30名。自主トレーニングとして集まった彼らであるが、見事に体力上位・中位・下位と分かれる結果となっていた。ちなみに小野田、藤原は中位である。

本来、IS操縦者　それも代表候補生や専用機持ちともなれば、どの国も『ありとあらゆる事態』を想定した訓練を課している。原作4巻において、ラウラとシャルロットが銃で武装した強盗三人を素手で制圧できたのもそのためだ。（勿論、織斑一夏と野々宮明、入江優助、早乙女大地はこれに該当しない）

女性なら誰でも憧れるIS学園に入学するため、IS学習やハイレベルな教育を受ける女に学力で負ける。

どのような事態にも対応できるように、国家が威信を掛けて、時には数年に渡って訓練を受けた女に体力で負ける。

『男が女より強かったのって、大昔の話だよ？』

原作において、クラスメイトにそう言われた一夏は『今、男は圧倒的に弱い。腕力は何の役にも立たない』とISの性能の強さについて独白していたが、それは大きな間違いだ。IS学園内に限って言えば、ISを使わない腕力だけの喧嘩でも男は女に負ける。

それを原作知識によって知っていた（アニメ版しか知らない奴らは原作派に教えてもらった）彼らは、こうして朝早くから集まっていたのだ。

一夏……？　幕が同室みたいだし、勝手に踏み込む勇氣はないです。

時間は過ぎて、朝八時。シャワーを浴び終わった僕らは朝食をと

るため、一年生寮の食堂に向かっていた。いたのだが……。

「おい比良坂、大丈夫か？」

藤原が見るに見かねたのか、葉川に肩を借りるようにして歩く比良坂に声をかけた。

常に顔色の悪い比良坂だが、いつもの二割増しで不健康になっている気がする。

「……………自慢じゃないけど、ボクは中学時代『保健室の主』と呼ばれていた男さ……………」

「ほんとに自慢じゃないなオイ」

「無理なら無理だって素直に言えよ。……………ゆっくりと鍛えていきやあいいんだから」

クラスメイトの一人、葉川が気遣う言葉をかける。葉川はぎっくりばらんに短く刈られた髪に、長身に鍛えられた引き締まった身体つきをしている。中学時代は野球部のキャプテンだったと知れば誰もが納得するだろう。

既に到着していたクラスメイトたちが確保していた席に比良坂を座らせ、僕たちは朝食を取りにカウンターへ行く。少し休めば回復するといっていたが、あまり無理はさせたくない。

「あ、おばちゃん！ 友達の分も合わせてお願いね！」

「はい、和食セットときつねうどんだよ。そっちは日替わりA定食が2つだね」

恰幅のいいおばちゃんに「ありがとう」とお礼を言うと、にかつと笑って返される。中学時代は給食だったから、学食というのはな

んだか新鮮だ。ちなみに僕が和食セット。うどんは比良坂の分だ。そうして席に着こうとした僕たちだが……。

「見てみて、やっぱり男子だわ」

「全員ジャパニーズなのよね？ やっぱり、ISの製作者が日本人なのが関係してるのかしら？」

「千冬お姉さまの弟もいるらしいわよ」

「えええ！ それって姉弟揃ってIS操縦者ってこと？」

「そうそう、噂じゃあ専用機持ちだとか」

「お姉さまの弟っていつくらいだから強いのかしら？」

……そうでした。一年生寮の食堂なんだから女子生徒も使って当然でした。1組男子が占領している食堂の隅の一角から微妙に距離を保ちつつも、女子が周りを囲むようにして群がっている。

女尊男卑のこの世界。何か滅茶苦茶で理不尽な命令をしてきたり、イチャモンつけてくる女子がいるのではないかと思っていたのだが、流石に男が30人もいると躊躇するようである。いや、そういう勘違いした 言い方は悪いが非常識な女性はIS学園に入っていないのだろうか。

まあ、そんなことはどうでもいいか。早く朝食を食べてしまおう。朝早くから運動したせいで腹ペコだ……？

「……………なぜ、いる？」

「ん？ なんだよ、いちゃ悪いのか？ 同じクラスなんだし、男同士仲良くしようぜ」

何時の間に座っていたのか。僕の向かいには我らが主人公、織斑一夏が座っていた。

「いや、別に悪くはないけど……………」

「だったら問題ないだろ。皆で一緒に食おうぜ」

問題はない、ないのだが……。

「箒、……いつまで怒ってるんだよ」

「……………」

織斑一夏のさらに隣、篠ノ之箒がいる。

ちなみにこの一角にいるのは全員男子。その合計は31名。篠ノ之箒以外の女子は遠慮がちに一定の距離をとっているため、ここだけ男女比が31:1になっている。IS学園ではまず見られない光景だ。

……絶対気まずいだろうな。僕らも気まずい。他の人たちも食事に集中しているフリをしながらこちらに意識を向けてるし。

「なあ、箒」

「だから、怒ってないと言っている」

彼女は一夏にろくに顔を向けていない。不機嫌そうな顔つきで、素早く箸を動かしている。

……大方、一緒に朝食を食べようと誘われたら、この男子がひしめく一角に連れてこられて不機嫌なんだろう。本心では二人きりで静かに話でもしながら食事をしたかったのではないだろうか？

「……………私は先に行くぞ」

「ん？ ああ。また後でな」

心底不思議そうに、食事を終えて去っていく箒を見つめる一夏。彼が女心というものを理解するのはいつなのだろうか。一夏は何かを思い返すかのように、追憶するかのように腕を組んで眼を瞑って

いた。時折、うんうんとうなずいている。
そこに現れる新たな闖入者。

「ちょっと、よろしくて？」

「へ？」

考え事をしている所でいきなり声を掛けられたのに驚いたのか、
一夏が素っ頓狂な声を出す。

「こ、この聞き覚えのある甘ったるいゆかな声。わずかにロールが
かった金色で豪華なちよろっとした長髪。いかにもなステレオタイ
プの貴族オーラ。」

「あつ、セシリア・オルコットだ」

思わずポツリと声に出してしまった。それに反応し、男子29名全
員がバツ！ と一斉に視線を向けた。セシリアが「ひうっ」と少し
だけ後ずさる。ちよろい。

「…………え、えと…………どういう用件だ？」

ちよっぴり怯えたセシリアを見て、それからセシリアを射殺さん
ばかりの熱視線を向ける男子（僕も含む）を見て、一夏はかろ
うじてそれだけ言うことができた。

一夏の反応に気を取り直したのか、セシリアはかなりわざとらし
く声をあげた。…………でも、まだちよっぴとビビってる。

「ま、まあ！ なんですの、そのお返事。わ、わたくしに話しかけ
られるだけでも光栄なので、それ相応の態度というものがあ

「……」
「……」
「……」

その態度が気に入らないものだったのか、一夏は露骨に嫌悪した表情になる。

ISを使う。それはすなわち国家の軍事力に直結する。ISに対抗できるのはISだけ。相手がISを持たず、こちらに数機のISがあれば国家解体戦争だつて行えるのだ。だからIS操縦者は偉い。ISを使う事ができる女は偉い。今の世の女性の大部分の思考がそれだ。

ま、彼女はすぐそれを改めるところか、原作では速攻で一夏に惚れちゃうんだけど。マジちょうい。

「悪いな。小野田や他の皆はどうか知らないけど、俺は君が誰か知らないし」

そこで僕の名前を出すな。……でも、僕の名前を覚えてくれたんだな。ほとんど話してない気がするんだけど。ちよつと嬉しい。

「わ、わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを!？」

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々の要求に答えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

…ほうほう。なるほど原作通りだ。彼女が2組となったことでイベントが消失したかと思つたが、こんな形で再現されるとは。

「代表候補生つて、何？」

「がたたっ！ ガシャーン！ 聞き耳を立てていた食堂の女子生徒

たちがずっこけた。おおい、原作だとクラスの数名だが、今は1年生のほとんどが聞いてるんだぞ。

スパアーンツ！

「いつてえ！……あれ、そんなに痛くない？」

「自分、本当にアホやなあ。単語から想像できへんのかい」

炸裂したのは織斑先生の出席簿……ではなく里中のハリセンだ。いい音がする割にそこまで痛くはない。

もう参考書は読んでいるはずだが、それでも分からないのだろうか？

「し、信じられない。信じられせんわ。極東の島国というのは、こうまで未開の地で……」

「オルコットさん。貴女には誤解のないように言っておくが、それが分からないのは織斑一夏ぐらいだ。彼を見て、どうか私たち日本人全てが織斑のような人間であると誤解しないで欲しい」

すかさず野々宮が眼鏡を光らせながらフォローに入る。あのキラリと光を反射させて眼を隠すやつ、どうやったらできるんだろうな。

「おい、なんかすごく馬鹿にされてる気がするぞ」

馬鹿にされてるんじゃない、馬鹿なんだよ……！ 馬鹿は自分のことを馬鹿だと自覚してないから馬鹿なんだよ……！

これは原作知識がどうこういう問題じゃない。世界が変わってからIS学園に入学するまでの約2ヶ月間、普通に生活していれば新聞雑誌やテレビにネット、外の情報を見れば自然と覚える知識がある。そんな常識の範囲のはずだ。

「国家代表IS操縦者の、その候補生として選出されるエリートのことですわ。……あなた、本当に“あの”織斑千冬の弟ですか？
だいたい単語から想像したら分かるでしょう」

「そついえばそつだな」

「……織斑ちゃん、外国の人に字面から想像したらうなんて言われて恥ずかしくないのか？」

入江、もうそれ以上は言うてやるな。というか、セシリアが31人も男子がいる中で織斑一人に的を絞って話しかけてきた理由はそれか。

織斑千冬。第一回IS世界大会『モンド・グロツソ』優勝者にして公式戦無敗の戦績を誇る、名実ともに世界最強のIS操縦者。全ての女性の憧れである存在。注目するのも無理はない。

「ふん！ つまりわたくしはエリート！ エリートなのですわ！」

「そつか。それはすごいな」

「……馬鹿にしていますの？」

うっむ、相手の神経を逆立てているようにしか見えない対応だ。

これはマズい。………ん？

ガタリと音がしたのでそちらを見ると、席を立った藤原が何やら比良坂に話しかけた後、一夏の背後に移動する。「うわっ！」と、突然肩を掴まれた一夏がビクリと反応した。

「はいはい、傾注傾注。イマイチ意味を理解していないお馬鹿な一夏くんのために、俺たちが説明してやるう。比良坂ー」

「は……？ えっと、どういうことだ」

状況が読み込めずにオロオロしている一夏の前に、携帯型端末を

持った比良坂が前に出る。彼が片手だけで素早くキーボードを叩くと、表示されるのは空中投影ディスプレイ。

「えー、俺たち男子のような例外を除き、普通に正規の手段でIS学園に入学しようとするれば、その難易度はとても高い。特に事前学習としてIS学習は欠かせない。つまり、女子たちは織斑の『電話帳』と何年にも渡って格闘し、理解できるように高度な教育を受けているわけだ」

ディスプレイには、IS学園の入学試験の難易度や倍率。事前学習する内容がずらずらと表示されている。

「で、IS学園は日本だけでなく世界中から生徒が集まるわけで、その倍率はトンデモないことになってる。つまりこの学園の女子生徒全員が、その中を勝ち抜いてきた優等生ということだ。で、ここから代表候補生の話に移る」

ディスプレイの映像が映り変わり、テレビなどで報道される候補生や専用機の画像になった。専用機持ちは国家代表かその候補。国によっては俳優業やモデルもする。国家公認アイドルのような存在なのだ。

「IS操縦者やIS学園の生徒は、一般から見たらそれだけでエリートってことになるが、その操縦者の中でも特に優れた技術と資質を持つ者だけが候補生になれる。才能がなきゃなれないし、ただ才能に胡坐をかいてるだけでもなれない。さっきセシリアがエリートって言ったのは事実なわけだ」

「な、なるほど……」

一夏の表情は妙に納得したものに変わっていた。さっきまではよ

く分からないから適当に生返事をしてたな……。

その説明と一夏の様子に自尊心を満足させることが出来たのか、セシリアは鼻息も荒くふんぞり返っている。ついでに乳も揺れている。

「……で、だな。いくらエリートと言っても所詮は候補。代表候補生が目指すべきは、他の候補生に打ち勝って国家代表となることだ。国家代表と候補生とはさらに大きな開きがある。お前にも分かり易く漫画で例えると、ベジータとナツパぐらい違うと思ってくれたらいい。ちなみに普通のIS操縦者がラディッツだ」

まともな解説だと思ったら、とんでもねえ例えを使いやがったアア……！

一夏や他の男子たちが大きくうるたえるのが分かる。
ディスプレイが次々に各国の国家代表を映し出し、最後に画像が『モンド・グロツソ』へと移り変わる。

「だが、国家代表IS操縦者となればそれで終わりなのか？ 否！ 断じて否！？」

各国代表たちは三年に一度開催されるIS世界大会、天下一武ど……げふん、『モンド・グロツソ』での優勝を目指すのだ。そこで優勝した者に与えられる『最強』^{ヴァルキリー}の称号こそが全てのIS操縦者が目指すべきモノ！

そして、その初代ヴァルキリーの称号を持つ人物が一人、この学園にいるな……？」
「そ、それは……」

藤原の顔が、眼が、くわっと見開かれる。

一夏は知っている、最強の人物を。彼は誰よりも知っている、地上最強の生物を。一夏は知っている、自分の姉の名を。

その名も、

「織斑^{フロリー}千冬だ」

「何でああああああ！?!?!?!」

スパアーン!!

里中から半ば強引に奪ったハリセンを思い切り叩きつける。

「藤原！ おまツ、何て恐ろしいことを言いやがる!?!」

「そ、そうだったのか……。セシリアがそんなに凄い奴だったなんて……よく分かってなかったとはいえ、俺はなんて口のきき方を……」

「ちょ、おおいワンサマーさん!? 今のを信じるのかよ？」

「……代表候補生の女の子たちは、千冬姉になることを目指してるのか。……千冬姉がっぱい……。千冬姉が……」

「なんか一夏の眼がぐるぐるになってて怖いんだけど……」

「おい、誰かこいつなんとかしろ!」

ぞわぞわぞわ……。

「この馬鹿騒ぎの原因は貴様らか」

食堂内が静寂で静まり返った。尻の穴にツララをぶっさされたような悪寒。僕たちはこの日、漫画や小説の中でしか知らなかった『殺気』というものを体感した。

ギギギと、壊れたブリキのように首を回す　間もなく、藤原と一夏がアイアンクローで釣り上げられた。

「あががががが……」

「痛い痛い痛い……」

そして、織斑先生の視線はセシリア・オルコットへも向いた。

「お前もだ。来い」

「ひ、ひひひひひひひひッ!!」

こわいですわいやですわ、と逃げ出そうとするセシリアの首根っこを掴んで。ついでに藤原と一夏もずると引っ張って、織斑先生は一年生寮から出て行った。

結局、その日藤原と一夏は昼休みが終わるまで授業に出なかった。

4話（後書き）

「お、織斑一夏……！ それに藤原恵一！ このわたくしにこのような屈辱を与えたこと、後悔させてあげますわ！」

その夜、セシリアは布団の中に頭まですっぽりと包まりながら宣言したそうなの。

5話

「あ
」

という間に翌週だ。すなわち今日は月曜日。クラス代表決定戦。

そこに、『白』がいた。

眩しい程に純白を纏ったISが、その装甲を解除して操縦者を待っていた。

「これが……」

「はい！ 織斑くんの専用IS『白式』です！」

クラス代表者決定戦。

第一試合 織斑一夏VS入江優助

第二試合 野々宮明VS早乙女大地

今頃一夏は白式を装着している最中だろうかと考えながら、僕たちは第三アリーナ・Bピットでアリーナ・ステージを映したモニターを眺めていた。

そこに映っているのは、既にアリーナ上空に浮かびながら待機している1機のIS。

「あれが入江の専用機」

「『ラファール・リヴァイヴ』……だよな？」

藤原が思わず疑問形で返してしまったのも無理はない。

本来のリヴァイヴはネイビーカラーに4枚の多方向加速推進翼がマルチ・スラスター特徴的なシルエットをしている。リヴァイヴは学校の訓練機として打鉄と一緒に使われているのを見ているから間違いない。それに比べて、入江のISはカラーだけでなくフォルムも違っていた。

背面部中央には加速推進装置が1基と、さらに1対の推進翼が中央部から二つの翼に分かれるようになっていて。やや大きめの脚部にはホバースラスターのようなものが見てとれ、見た目に反して機動性と加速性、姿勢制御に優れているように思える。機体各部にどこどこあるのもスラスター口だろうか。

原作でシャルロットが使っていたラファール・リヴァイヴ・カスラム？が全体的な性能の向上と多様性役割切り替え（マルチロール・チェンジ）を目的とした汎用型なら、彼の機体はその高機動型といったところか。

「しかし、なんだな……」

「ああ……」

入江のISは本来のリヴァイヴの緑色から黒と赤に変更されていた。黒を主体に、炎をイメージした赤のカラーリング。

「派手な機体だな」

「まあ、金ぴかのISを持ってこられるよりはマシだろ。……と、あちらさんも準備が終わったみたいだな」

新しく表示されたモニターには、今まさに開かんとするAピット

のゲートが映っていた。

「よう、織斑ちゃん。どうやらISの搬入は間に会ったみたいだな。あんまり遅いから、野々宮と早乙女の試合が先になるかと思ったぜ」

右手に持ったアサルトライフルを肩に担ぎながら、入江はまるで遊ぶ約束に遅れそうになった友人に話しかけるような気楽さで声をかけてくる。

黒と赤の機体『ラファール・リヴァイヴ』。その外見とパーソナルカラーは学園の訓練機とは異なる、まさしく「専用機」といった印象を感じさせる。入江はいつものサングラスをかけていないが、その代わりに黒いバイザー状の高感度ハイパーセンサーを頭部に装着していた。

「ああ、待たせて悪かったな」

警戒、敵IS操縦者の頭部ハイパーセンサーが射撃モードに移行。セーフティロック解除を確認。

すでに試合開始の鐘は鳴っている。いつ撃ってきてもおかしくないことを再確認する。

「まったくだ。んじゃ、さっそくで悪いが」

警告！ 敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認 警告！

ロックオンを確認 警告！

「マツハで八チの巢にしてやんよ！」

連続した火薬の炸裂音が響き、五五口径アサルトライフルから弾丸が吐きだされる。映画で見るとはまったく違う迫力と鼓膜を打つ音。ほとんど反射で白式を動かして回避する。

「うおっ!？」

いくらISが速いといっても、それが弾丸よりも早いわけがない。白式のオートガードが体を守ってくれたが、形成途中の装甲が衝撃で歪んでいく。直後、遅れた衝撃が鈍い痛みとして襲って来た。

(くそっ、俺が白式の反応に追いつけてないのか!?)

ISバトルの勝敗はどちらかのシールドエネルギーが0になれば決まる。今の攻撃はバリアーを完全に貫通するほど強力な武器ではないため実体の機体装甲へのダメージは低い、それでもシールドエネルギーは確実に減っている。

「撃つべし! 撃つべし! 撃つべし!」

アサルトライフルから吐き出される弾丸。フルオートによる攻撃が上空から降り注ぐ。いつの間にか頭上に位置取られていた。さっきからロックオン警報が鳴り響き続けている。

「装備、装備は!?! ……がっ!」

「動きを読む……動きを読む……。当てようとは思わな、無理に当てようと意識するな。弾幕での予測射撃……相手を射線に突っ込ませるように……!」

無理矢理な加速で射撃を振り切ろうとするが、機体を通して感じる衝撃は入江の追撃から逃れられていないことを痛感させる。

さつきから俺は入江の周りを旋回するようにして背後を取ろうとしているのだが、そんな狙いはお見通しとばかりに対応してくる。

(くそっ、こつちにも射撃武器か、せめて物理シールドでもあれば……！)

現在展開可能な装備の一覧を確認。だが無情にも、表示された装備は一つだけだった。

「近接ブレード……って、これだけかよ!？」

ええい、ままよっ!

キイイーン !

高周波の音とともに、右腕から光の粒子が放出される。光が収まった時、そこには長大な片刃のブレードが握られている。これが俺の武器。俺の『刀』。

「ブレード……当たってやるわけにはいかねーな!」

入江はそう呟いてから、再びアサルトライフルを装填して構える。

「こつちだつて、お情けで当たってもらおうなんて思っちゃいねえ!」

激戦が、始まった。

襲ってくる射撃を身を捻る様にしてかわし続ける。避け切れない

ものは防御し、それ以外は回避する。

（ やれる。あとは集中するだけだ）

それに、さつきからISの動作が軽い。白式の最適化処理が進んでいるのか、それとも俺自身がISに慣れてきているのか、だんだんと白式を動かす“コツ”というものがつかめてきた。

（入江はさつきから射撃しかしてこない。距離をつめればこちらが優位なはずだ）

見る限りでは、入江のISに近接用の武器はついていない。『待機状態』の可能性もあるが、それでも近づいてから展開したのでは間に合わないはずだ。

射撃を避けるために左右に蛇行するように機体を揺らしながら跳ね、虚をつくようにそのひと跳ねから急激なターンを行う。そうして徐々に接近していくと、そこで唐突に攻撃が途切れた。

「……やっべえ」

「弾切れか？ ……だったら！」

無理矢理の加速で一気に距離を詰める。ガギンツ！ 響くのは派手な金属音。間合いに入り、上段から下段への袈裟を放ったはずだった。だが、あるうことか入江の奴は斬られる前に手に持ったアサルトライフルをぶん投げてきたのだ。

「くっ、ただどこでもう射撃は怖くないぞ……って、ええ！！？」

視線を向ければ、後方へ下がりながら入江は何か小さなものを投げつけていた。ISの警告によって、それが投擲されたグレネードだと判明する。

爆発が起こった。

「あらら」

ピットから観客席へと移動して、クラスの皆と試合を見ていた僕たちだったが、グレネードの投擲によって起きた爆発に巻き込まれる白式を見て思わず声が出ていた。

アリーナには、1組の男子だけでなく他のクラスの女子までもが集まって来ていた。当然だ。専用機での戦闘。それも世にも珍しい男のIS操縦者同士の戦いなのだから。

「女子たちは、これで一夏が負けたって思っただろうね」
「だろうな」

それを眺める藤原の眼は、何か眩しいものでも見るかのように細められている。

「……やっぱり、ああいうのを主人公って言うんだろうな」

何を今更。一夏がインフィニット・ストラトスの主人公であることは僕たち30人全員が知っていることだ。

爆発によって生まれた黒煙が晴れる。その中心にあるのは、純白の機体。

そう、最適化^{フッティング}が終わり、一次移行^{ファースト・シフト}が終了した姿で。

「……一次移行か。このタイミングで完了するなんて、カッコイイじゃねーの」

飄々と言う入江だが、表情に出た驚きは隠せていない。

変化は劇的だった。

全身を包むISは光の粒子に弾けて消え、より洗練された形状と
なって変わっていく。角ばった部分は、滑らかな曲線とシャープな
ラインに。工業的な凹凸は消え、それは中世の騎士が纏う甲冑を思
わせるデザインへと変貌した。

そして何より変わったのは、その武器だ。

「雪片」

近接特化ブレード《雪片弑型》。

それは、かつて千冬姉が振っていた専用IS『暮桜』の装備の
名称、雪片と同じ名だ。

「俺は世界で最高の姉さんを持ったよ」

まったく、つくづく思い知らされる。でももう、守られるだけの
関係は終わりにすべきだ。

「俺も、俺の家族を守る」

「……そうかい」

「とりあえずは、千冬姉の名前を守るわー!」

千冬姉の弟だったのに、クラスの男子の中で情けない姿を見せて
ちゃ格好がつかない。

「というか、逆に笑われるだろ」

入江の手には、いつの間にか新しい銃が握られていた。面制圧力
に特化した連装ショットガンだ。今から逃げても間に合わないだろ
う。だが、

（この間合いなら、俺の攻撃の方が速い……！）

右手を握り締める。そこにある雪片が、答えるかのように低い機
械音を鳴らす。

ギンツ
！

上段からの一閃。縦に真っすぐ相手を断ち切るその太刀筋。入江
は後方へとバツク転するかのような挙動で雪片から逃げるが、その
際に手に持ったショットガンが弾かれて落下していく。

この好機を逃すまいと、俺は再度入江へと突撃する。

「おおおおっ！」

もはや対応できる武器を持たない入江の間合いに飛び込んだ俺は、
下段から上段への逆袈裟払いを放つべく動き、

「だけど、今の織斑ちゃんじゃあ誰も守れねえよ」

「な、！？」

それより早く繰り出された左足の蹴りに柄頭を打たれ、押し

込まれて封殺された。

「少なくとも、ずぶの素人同然のオレに苦戦してるようじゃな!!」

ぐりん、と。入江は機体各部に増設された独立稼働推進装置を最大で稼働させると、強引に後ろ回し蹴りを放った。
サブ・スラスタ

銃弾を受けた時とはまったく別の衝撃が体を突き抜け、その衝撃のままによろめいて入江の姿を見失う。

「ッはああああああああああ　　!!!」

ハイパーセンサーによって強化された知覚がその雄叫びを、頭上から突撃をかけてきたリヴァイヴの姿を捉える。

ISの全方位視界接続は完璧だ。けれど、それを使っているのは人間、真後ろや真下、真上なんかはどうしても直感的に『見ることできない』。送られてくる情報を頭の中で整理する分、そこにはコンマ数秒の遅れが生じる。

「!?!」

雪片を振るう余裕もなく、『蹴り』飛ばされた。

この程度の攻撃なら操縦者の命に危険がないため絶対防御は発動しない。つまりシールドエネルギーはほとんど減らない。しかし、絶対防御が発動しないということは操縦者への衝撃はそのまま伝わる。何よりも、せつかく縮めた間合いが離されてしまった。

だが、今の俺には　そんなことはどうでもよかった。入江に言われた言葉が聞き捨てならなかった。

「っ！　なら強くなるさ！　自分の全てを使って、誰かを！　誰だ

って守れるくらいに！」

「できるのか？ ISってのはそんな簡単に扱えるものじゃねーぜ……今のまんまじゃ、誰かに“守られる”だけだ」

警告！ ロックオンを確認 警告！ 新たな銃器。携行型グレネードの発射を確認。

背後の大型スラスタを最大出力で吹かして回避。全開の力で加速する。

「できないじゃない、やるんだ！」

強さ。それは心の在処。己の拠所。自分がどうありたいかを常に思うこと。……少なくとも、俺はそう思っている。

俺は強くなりたい。強くなって、誰かを守ってみたい。

「だったら見せてみな。言葉じゃなくて行動で！」

「ああ、俺は俺の家族を守る。友達や仲間を守る！ お前だって、守ってやるさ！」

「……………は？」

俺の心は今、燃え立つような気迫で満ちていた。追いつけていなかったはずの白式の性能にもついていけない。俺と白式は文字通り、一体となっていた。

手の中でエネルギーがその密度を増していくのを感じる。刹那、その刀身が光を帯び、より強い存在となって俺に力を伝えてくる。目の前にはウィンドウが現れ、「零落白夜」の四文字が表示された。

「おおおおっ！！！」

加速。加速加速加速。バイザー越しに驚愕に歪む入江の表情が見

える。

そして俺は、雪片でリヴァイヴを横なぎに斬り払った。

『試合終了。両者　ドロロー』

……え？

「え、なんでだ……？」

多分、この時の俺はぼかんと間抜けな顔をしていただろう。そして向き合った入江は、何とも言い難い表情を俺に向けていた。どういうこと……？

何が起こったかわからないまま、試合は終了。結果は引き分けだった。

「えっと、つまり白式の単一仕様能力ワシオフ・アビリティ、雪片の『零落白夜』にはすごいエネルギーが必要で……」

「……自分のシールドエネルギーを攻撃に転化しているということですか？」

俺の言葉を篤が続ける。

Aピットに戻り、何故引き分けになったのか千冬姉に聞くと返ってきた答えがそれだった。

相手のバリアー残量に関係なく、機体本体に直接ダメージを与える『バリアー無効化攻撃』。絶対防御を無理やりに発動させることでシールドエネルギーを大幅に削ぐことができる、まさに一撃必殺

ともいえる特殊能力。それは全IS中でも最強の威力を誇る。

「でも、発動してるだけでシールドエネルギーを消費しちまうだなんて」

「武器の特性を考えずに使うからああなるのだ。明日からは訓練に励め。暇があればISを起動しろ。……返事はどうした」

「……はい」

つまりこの試合が引き分けになったのは、俺の攻撃でリヴァイヴの絶対防御が発動してシールドエネルギーが0になると同時に、零落白夜の発動によって白式のシールドエネルギーも0になったということなのだ。

……こういう場合、クラス代表はどうなるんだろう？ 俺と入江、両者敗北で、野々宮と早乙女の二人で決着をつけるのだろうか？

「あー、いたいた！ おーい織斑ちゃん！」

そんなことを考えていると、ピット内に間延びした声が響いた。この声、そして『織斑ちゃん』という呼び方。間違いない。

「い、入江……！」

「どうしたー。ハトが荷電粒子砲喰らったような顔して？」

そんな比喻表現は聞いたことないぞ。というか顔を見る前に一瞬で消滅しちまうだろ。

これはあれか、新章突入、急転直下、怒涛の展開、あのライバルが味方になって再登場。入江優助が仲間になりたそうな表情でこちらを見ている。 仲間になりますか？

「ドラ エか！」

「うん？」

「なに？」

「……織斑くん？」

「お前は何を言っているんだ？」

「あ、いや……何でもないです」

上から入江、篝、山田先生、千冬姉の反応である。自重すればよかつた。

しばらく不思議そうな顔を見ていた入江だったが、（というかサングラスで眼は隠れてるんだけどな）千冬姉に向き直るとあっけらかんとした表情で言った。

「今回の試合なんすけど、俺の負けにしてください」

いきなりなんてことを言うんですかこの人は。

「ほう、……どういうことだ？」

「いや、流石に途中まで初期設定のまま戦ってた相手に追い詰められて、あの終わりで引き分けたと納得できないんで。……駄目っすか？」

「お前がそれでいいなら結構。……しかしあの試合は何だ？ あの程度の相手に射撃を全弾命中させることができないでどうする。動きにも無駄が多い。その結果として白式に接近戦を許してしまっている。それにお前のリヴァイヴには近接用の武装が積まれているはずだ。全ての武装を1秒以内に展開し、使いこなせるようになれ」

「……了解です」

情け容赦のない鬼教官っぷり。褒め言葉なんて一つとしてありやしない。叱られることで伸びる人もいれば、褒めることで伸びる人

もいるはずですよ千冬姉。まさに鬼、鬼畜姉。

パンツッ！

「うぐぐ、すいません」

こういう時は素直に謝るに限る。余計な事を言えばまた脳細胞が死んでいくことになるからだ。……いや、さっき俺何も言っただけよな？

「次は野々宮と早乙女の試合だ。お前たちはさっさと出て行け」

さっきは守るなんて言っただけど、この人はそもそも守る必要がないよな、絶対。そういう危機に陥る場面がまったく想像できない。

「行くぞ、一夏」「あ、ああ」

……そういえばもう一人いたよ。優しさ成分控え目のファースト幼馴染が。てかクラス違うのにここにいて大丈夫なのだろうか？ 2組でちゃんと友達を作れてるかお父さんは心配だぞ。

俺は重い腰を上げてアリーナ観客席へと向かおうとする。

「そつだ、織斑ちゃん。さっき試合で言った事、訂正するわ」

そんな俺の背中に、入江の声がかげられた。

振り向くと、入江は俺たちとは反対方向の出口の扉に手をかけた

まま俺を見ていた。口元にニヤリと、何時もの軽薄そうな笑みとは異なる不敵な表情を浮かべ、サングラス越しに俺を見つめている。

「お前の台詞を聞く度に、何を青臭いことを言ってるのかと思ってたけど。……お前みたい奴、嫌いじゃないよ」

……はて？ 俺はそんなにコイツの前で喋ったことがあるだろうか？ まるでIS学園に入学する前から俺の事を知ってるような口ぶりだ。

そこまで真面目な顔で言ってから、入江は急におどけたような表情になる。雰囲気もいつもの軽薄なものに戻っていた。

「『お前だって、守ってやる』……あの台詞、シビれたね。オレが女だったら惚れてたかもな。でも悪イな、オレはそういう趣味ないから。お前の事は嫌いじゃないけど、……そういうことで、スマン！」

「じゃあな、“一夏”！と、早口でまくし立てると入江は風のように去って行った。疾風の再誕リファールという機体リウアイヴに乗っているだけあつてか身軽な男である。ふむ……。

「えつと……箒？ 何でそんなに顔を赤くしてるんだ？」

千冬姉に怒られる前に移動しようと思ったのだが、俺の幼馴染は何やら顔を真っ赤にしてわなわなと震えていた。あれ？ どうしてアリーナに竹刀を持ちこんでいるんですか？ 素振りの練習？ 熱心だな。

「こ、この、破廉恥な……！」

「お、織斑くんっ、やっぱり男の子に興味があるんですかっ！！」

そ、そんな……駄目です！ 男の子同士でなんて、そんな、そんな………」

おいおい山田先生、あなたは何を言ってるんですか？ なんて両頬に手を当てて体をクネクネさせてるんですか？

分からん。さっぱりわからん。よくわからないが、変な誤解が発生してることだけは理解できたぞ。

「き、きええええええええっ！！！」

怪鳥のような奇声をあげて、箒の振り上げた竹刀が振り下ろされる。

バシーンッ！！

竹刀の音が響いた。

5話（後書き）

男相手でも無自覚にフラグを立てようとする一夏さん。

白式のエネルギー切れが遅かったのは入江の技量不足が原因。セシリアほどにはシールドエネルギーを削りきれなかった。というか強さで言えば入江はシャルの下位互換だし。

リヴァイヴ？

フランスに本社を置くIS企業、デュノア社が開発した第2世代型IS。傑作機とも言われるラファール・リヴァイヴの特注使用。

正式名称は『ラファール・リヴァイヴ・入江優助専用カスタム機2号』なのだが、長いのでリヴァイヴ（リヴァイヴ？）と作中では呼称。ちなみに1号はデュノア社のIS開発室でデータ収集に使っていた『ラファール・リヴァイヴ』。入江が勝手に名付けた。

シャルロットのラファール・リヴァイヴ・カスタム？に比べ、より機動性を重視した射撃型の機体となっている。その武装は燃費を重視したためか、実弾系のみ。

近接ブレードも装備しているはずなのだが展開は苦手。そのため、対一夏戦では目の目を見ることがなかった。曰く、「蹴ったほうが速い」とのこと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7994x/>

IS ~ クラスメイトは全員男 ~

2011年10月30日02時18分発行